

日付:2015年8月16日／聖書:コヘレトの言葉3:1～11

主題:「何事にも時がある“クロノスとカイロス”」

コヘレトの言葉の初めに「なんという空しさ…すべては空しい」とある。この「空しい」は、「ヘベル」という語が使われ、37回も繰り返して出てくる。この書はこの世の無念さ、不条理を淡々と語っているようにも見える。このヘベルは、創世記4章のカインの不幸な弟アベルの名前と同じである。カインとアベルの物語は、聖書に出てくる最初の殺人。アベルは、神に受け入れられたにもかかわらず、兄の嫉妬によって殺害された。彼の人生は何だったのか？どんなに財産を持っていても、神に受け入れられていても、彼の人生は余りにも空しいではないか。アベルの人生イコール「空しい」というところからくる。そういう空しい出来事は、この世の現実社会において良くあることだが、この書は、そういうこの世の現実をありのままに記している。ただ、私たちが忘れてならないのは、この世の現実のただ中に神は人となられ、イエスとしてこの世界に生まれた。そこに私たちは、希望を見出していきたい。「すべて神を信じる者は、失望に終わることはない」(ロマ10:11)。

さて、「時」には二つの意味がある。クロノス(淡々と流れる、漠然と流れる時)とカイロス(点としての時、意味のある時)。《何事にも時があり》とある「時」はカイロスである。私たちには、それぞれに時がある。生まれる時、笑う時、愛する時、泣く時、失う時…私たちには、「私の」時があるわけで、神は私たちのその時を、決してクロノスとしてではなく、カイロスとして共に居られたということの意味している。それは同時に、私が他者の時をどう見ているのか？ということも同時に問われている。他者を大事に想う時、その他者の「時」は、意味の無いクロノスから、カイロスに変えられていくということ。その時に「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣く」ということが生まれてくる。

昨日は、「敗戦記念日70年」の時を迎えた。私たちは、その戦争の歴史をカイロスの時として、史実を学び、しっかりと心に刻んでいくことが、これから後も戦争をしない国として、戦後80年、100年と迎えることができよう。しかし、二日前の安倍首相の戦後70年談話を見る限りでは、非常に危ういものを感じる。歴史を淡々と流れるクロノスとしてしか捉えていない歴史観、人の言葉を借りてでしか物事を語れない薄っぺらな歴史観でしかない首相の言葉に、危機感を覚えてしまう。ただ私たちキリスト教会は、この世の暗闇が、より深く深いほど、イエス・キリストの放つ光が際立つということであり、この時代のこの時を、カイロスとして共に歩んでくださるキリストを覚え、希望を持って私たちに来る歩みを担わせて頂きたい。(神谷)